

本書の訳者の一人、岸由二氏は次のように述べる。

世界の自然保護は、大論争と新しい希望の時代に入った感がある。人の暮らしから隔絶された「手つかず」の自然、人の攪乱を受けなかったはずの過去の自然、「外来種」を徹底的に排除した自然生態系、そんな自然にこそ価値ありとし、その回復を自明の指針としてきた伝統的な理解に、改定をせまる多様な論議・実践が登場している。

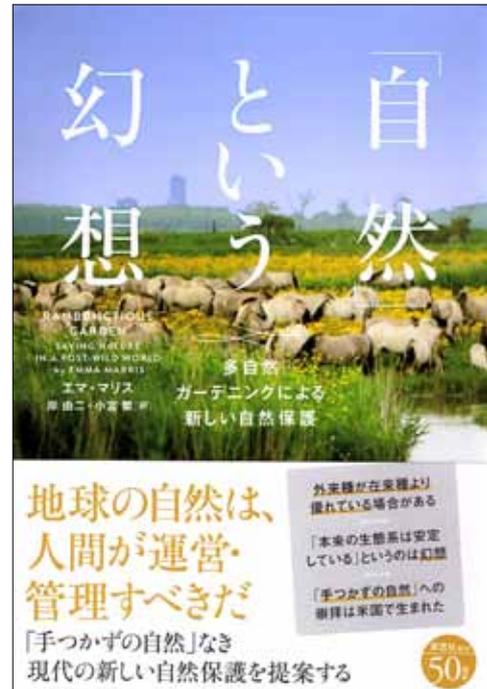
ここ10年ほど、その新時代を展望する出版が英語圏で目立っている。一端は関連の翻訳書(ピアス『外来種は本当に悪者か』[草思社]など)を通して我が国にも波及しているが、実は2011年に出版された本書の原書 *Rambunctious Garden: Saving Nature in a Post-Wild World* (Bloomsbury)こそ、新時代到来を告げた本だった。著者のエマ・マリスは、ネイチャー誌をはじめとする専門誌を舞台に、崩壊する古い論議、新しい実践、そして新しい自然のヴィジョンを丹念に取材にもとづいて紹介し続ける、新時代の卓越した環境ライターだ。(「訳者あとがき」309頁)

岸氏が述べるように、本書は従来の自然環境保護の状況をハワイやイエローストーンなどを例にとって叙述することから始まっている。自然を保護すること、環境を保全することなどをどのように考え、どのようにその理念を実践してきたかについて報告しつつ、では、保護すべき「取り戻せる自然」の始まり、あるいは「手つかずの自然」とはどのようなものが想定されているのかを問う。そして、「外来種」をどうするのかについても問題提起する。

本書にしばしば登場する「ウィルダネス wilderness」は、「野生生物のみが棲息する無住の未開耕作地」という基本的な意味を持つが、アメリカでは、とくにヨーロッパ人入植以前の「未開」の状態を残している原野や森林などの自然を意味することが多く、一部は国立公園などとして保護されているので、「保護区域」をも指す(307頁)。同時にこの観念を用いた自然保護の現況の観察を通して、「戻すべき自然の姿」のあいまいさやこの観念を基盤とした環境保護の再考を促している。

マリスは、人間が認めるかどうかに関わらず、人間が地球全体を管理し始めているから、「手つかずの自然」「手つかずの wilderness」へのロマンチックな思いを抑えて、人間自身の手で世話をすべき「地球大の多自然 rambunctious garden」という、もっと豊かな含意のある思いに心を開く必要があると述べる。「川」は人工物であるという発見は、生態系を回復するというよりは、持続可能な自然について、設計していくという方向を目指しているようである(第8章)。

本書の後半では、自然保護や自然保全は、ある特定の地域を囲い込んで在来種を保護・再生するという方法だけだろうか、もっと、多種多様な仕方でも可能なのではないかという視点で、「自然」を捉え直していく。前述の rambunctious garden という言葉は、「多自然ガーデン rambunctious garden (ごちゃまぜの自然)」と訳されているが、そうした視点から提案された新しい「自然」、新しい「生態系」を目指すものであり、本書のキー



ワードとなっている。これを岸氏は次のように解説する。

局所的擬似的に「手つかずの自然」を模倣したものも含め、今や自然はすべて人の干渉・管理のもとにある「ガーデン(庭)」となった。在来種ばかりでなく多様多彩な外来種もそこには含まれる。自然をこのようにとらえれば、失われつつある自然を守るだけでなく、さまざまな目的・目標で自然を増やしたり、作り出したりすることにも価値を見出すことができる。このような考えをもとに、私たちの暮らしとともにあるリアルな自然保護のあり方を、マリスは rambunctious garden と呼び放つ。(311頁)

第10章でマリスは、「昔に戻す」以外の自然保護の7目標を挙げ、rambunctious gardenの可能性をも議論していく。その目標は、①人間以外の生物の権利を守ろう、②カリスマ的な大型生物を守ろう、③絶滅率を下げよう、④遺伝的な多様性を守ろう、⑤生物多様性を定義し、守ろう、⑥生態系サービスを最大化しよう、⑦精神的、審美的な自然体験を守ろう、である。

自然とは何か。自然をどう捉えるのか。自然保護や環境問題についてどのように考えていくのか。本書を読みながら、どんな実践ができるのかを思い描くことができるかもしれない。

目次は以下の通り。

- 第1章 自然を「もとの姿に戻す」ことは可能か
- 第2章 「手つかずの自然」を崇拝する文化の来歴
- 第3章 「原始の森」という幻想
- 第4章 再野生化で自然を増やせ
- 第5章 温暖化による生物の移動を手伝う
- 第6章 外来種を好きになる
- 第7章 外来種の交じった生態系の利点
- 第8章 生態系の回復か、設計か?
- 第9章 どこでだって自然保護はできる
- 第10章 自然保護はこれから何をめざせばいいか